O G A S A W A R A

海洋島（かいようとう）

第 4 巻 第 6 号 (通巻 35 号)　東京都小笠原水産センター

2003 年 1 月 10 日発行
〒100-2101 東京都小笠原村父島字清瀬　☎ 04998-2-2545　Fax. 04998-2-2546

年頭のごあいさつ

小笠原水産センター
所長 米山純夫

新年明けましておめでとうございます。

水産業をめぐる状況は、全国的な不況とデフレ、輸入水産物の増加、魚価の低迷、資源の減少など大変厳しいものがあります。また、近年、狂牛病や環境ホルモンの問題などにより、消費者の食品の安全性や表示に対する関心がこれまでになく高まっています。

小笠原の漁業はカジキ･マグロ類を対象とした小笠原式深海たて縄漁法の開発により、従来の底魚一本釣りに依存した漁業形態から脱却し、底魚資源の枯渇という深刻な問題をひとまずクリアーすることができましたが、将来にわたって安定した生産を確保するにはさらに新しい漁業を開発していく必要があると思います。

このため、水産センターでは次のような未利用資源の開発調査をすすめてまいります。一つはキンメダイやマルゴシミノエビなどの深海資源で、その資源量や漁場などは十分解明されていません。これまで確認されたキンメダイ漁場は父島、母島から遠く地元漁船は利用しにくいため、近場漁場の開発が課題になっています。もう一つはこれまでほとんど漁獲の対象になっていなかったカツオ資源です。カツオは鮮度の低下が速く島外出荷できないことが障害になっていましたが、高速船が就航すれば島外出荷も夢ではありません。特に2月3月、初鰹の時期には高値で取引されるため新たな漁業となる可能性があります。小笠原近海におけるカツオの漁場形成状況や鮮度保持のより良い方法についても検討していきたいと考えております。

昨今の魚価の低迷は特に養殖漁業の経営に大きな影響を与えていますが、こうした状況をふまえ、種苗の生残率を向上させ生産コストをさげるための技術支援や、効率的な養殖技術についての情報収集などを行っていくつもりです。また将来に備え、大型ハタ類やイシガキダイなどの種苗生産技術開発を継続します。小笠原は本州から遠く離れているという不利を抱えている一方、汚染のないきれいな海に囲まれているという利点を持っています。小笠原の漁業振興のためには、こうした利点を生かし、消費者の意識をふまえた対応をしていく必要があるのではないでしょうか。

昨年は、小笠原周辺で海難事故が多発しました。航海の安全は漁業生産の最も基本的な部分です。当センターでは無線局を中心に事故発生の予防や緊急時の対応に引き続き当たってまいります。

最後になりましたが、今年1年の皆様の航海の安全と大漁をお祈り致します。

ヒレナガカンパチ稚魚の標識放流

水産センターでは昨年秋にヒレナガカンパチの大量種苗生産試験を行い、11 月に 3cm サイズの稚魚約1万尾の生産に成功しました。この試験は 11 月で終了しましたが、生産した稚魚を港内の生け簀で飼育し、12 月 25 日に下記のとおり標識放流しました（図 1）。釣られた方は水産センターまでご一報下さい。

放流魚種　ヒレナガカンパチ
放流数　1,877 尾
体長　約 10cm
放流場所　兄島滝之浦
標識方法　右の腹ビレを基部付近から切除。ただし、時間がたつと再生してきます。再生の跡があるものは標識魚と判断します。

図 1 稚魚放流の様子

訂正 2002 年 7 月 22 日発行の本誌 33 号の記事の中に誤りがありました。下記のとおり訂正してお詫びいたします。

本文末尾から 8 行目

誤— B期卵でふ化後 1 日程度の‥

正— B期卵で産卵後 1 日程度の‥

＊座礁船炎上事故による漁場汚染被害にあわれた伊豆大島の漁業者の皆様にお見舞い申し上げるとともに勝手に応援させていただきます。がんばろう大島！！